

第33回

## アジアの独立

監修・講師  
水島 司

### 学習のねらい

近代に入り欧米諸国の植民地となっていたアジア諸地域で、19世紀末から植民地支配から脱しようとする運動が盛んになり始める。今回は、18世紀半ばからイギリスの植民地支配下に置かれたインドの独立運動を例にして、運動の出現、組織、運動の形態、リーダーと民衆の関係、運動内の対立、独立の結果について学ぶ。

＜インド国民会議の設立＞

国民会議 ベンガル分割令 分割統治

＜ガンディーと「民族」の発見＞

非暴力・不服従 一つのインド 塩の行進

＜インド・パキスタンの分離独立＞

ヒन्दゥーとムスリム 大戦協力 分離独立

### ■ ■ ■ インド国民会議の設立 ■ ■ ■

植民地支配下のインドでは、植民地統治システムが生み出した官吏や法曹関係などの領域に進んだ少数のエリートと、厳しい貧困の下で日々の生活に追われる多くのインド人民衆が存在したが、いずれも植民地支配による制約下に置かれていた。植民地支配に対する反発が広がる中で、19世紀の終わりごろにエリートで構成される**インド国民会議**が創設されたが、その目的はイギリスとの融和的関係の維持でしかなかった。20世紀に入り、イギリスが分割統治策として**ベンガル分割令**を出すと、それに対する反発が一気に高まり、国民会議は自治を目指す政治的な運動を行う国民会議派へと変身した。

### ■■■ ガンディーと「民族」の発見 ■■■

国民会議派は、政治的な影響力を強めたが、しかしその運動はエリート内での運動に留まり、民衆との距離は遠いままであった。第一次世界大戦が起きると、イギリスはインドを大戦に参加させる一方で、戦争協力を促すために自治を約束した。それにより、多くのインド兵がヨーロッパやアフリカの戦線に投入され、多くが犠牲となった。しかし、大戦が終了すると、イギリスは自治の約束をほごにし、逆に治安維持法を制定してインドの民族運動を弾圧した。それに対して、南アフリカから帰国したガンディーは、非暴力・不服従を唱えて運動を展開した。ガンディーは、分割統治策によって国民会議とは別個の組織をつくっていたムスリムとの連携を図り、また、運動の中でエリートと民衆との距離を縮めるなど、インドの人々を一つの民族としてまとめていく役割を果たした。

### ■■■ インド・パキスタンの分離独立 ■■■

ガンディーの理想は、しかし、現実には容易に実現し得ず、民族運動は苦難の道をたどった。最も大きな問題は、少数派であるムスリムが、多数派ヒンドゥーの支配を恐れて離反したことであった。運動が沈滞する中で、ガンディーは「塩の行進」を企てて立て直しを図ったが、両派の溝は縮まらなかった。第二次世界大戦でイギリスはインドを再び参戦させた。イギリスへの戦争協力をめぐって、戦争協力を拒否した国民会議派の指導者達は投獄され、他方、協力を約束したムスリム連盟は、1940年にはムスリムとヒンドゥーは異なる民族であるという二民族論を打ち出し、別個の国家建設に向かった。大戦により、イギリスは民族運動を抱えたインドの統治能力を喪失し、1947年にインドは独立した。しかし、それはインドとパキスタンという二つの国家への分離独立であり、現在に至るまで両国家の対立関係は続いている。

#### 考えてみよう 調べてみよう

- アジアの各地域が欧米勢力の植民地支配に入っていく時期と状況、それらの地域での独立運動の指導者や運動組織、独立の時期について調べてみよう。
- インドで、19世紀末から独立までの間にどのような政治運動がなされたのか、主な特徴を調べてみよう。
- アジアの国々が独立する際に、それぞれどのように領土が区切られていったのか調べてみよう。